

研究可能テーマ

研究可能テーマ	研究指導者	受け入れ可能院生数
<p>(1) 統合失調症モデル動物における情動記憶障害に関する研究</p> <p>従来行動上の統合失調症動物モデルと考えられてきたメタンフェタミン処理動物において、ストレス負荷時に扁桃体ドパミン放出が亢進していることが見出され、情動記憶障害が存在していることが示唆された。そこで、このモデルを用い、情動障害発生の年齢依存性、各種薬物の有効性を検討する。</p>	石郷岡教授 稲田講師	2
<p>(2) 統合失調症治療における気分安定薬の役割</p> <p>統合失調症の薬物療法において、抗精神病薬に気分安定薬を併用する手法がとられることは多いが、その有効性を検証した報告はほとんどない。そこで気分安定薬併用の有無で決定される2群間で、各種アウトカムに対して定義されたエンドポイントを用い、有効性、安全性の検証を行い、臨床判断に寄与できるエビデンスを得る。</p>	石郷岡教授	2
<p>(3) 恋愛妄想の精神病理学的研究</p>	古城講師	1
<p>(4) 季節性感情障害の長期経過と治療反応性</p> <p>現在、感情障害（気分障害）は、生物学的観点、社会心理学的観点など様々な観点から研究されているものの、その成因はいまだ十分に解明されていない。その中で、日照時間の短縮する季節に発症、再発するという特異な自然経過形態をとり、高照度光療法が有効とされる季節性感情障害は、感情障害のなかでもその成因解明が最も早期に期待されるものの一つであり、感情障害一般の成因解明に貢献するところが大きいと思われる。厚生労働省感情障害研究班に参加する研究施設を中心とする28施設の協力を得て、1988年より季節性感情障害の治療反応性と長期経過をprospectiveに調査中である。各施設を受診した季節性感情障害例全例について、一定のプロトコールに従いその人口統計的特徴、症状特性、経過形態、抗うつ療法の効果、光療法の効果、生体リズム測定などに関する調査を実施中である。特に、光療法有効例と無効例をそれらの諸点に関して比較検討することにより光療法有効例の諸特徴を明確にし、光療法に対する良好な反応性の予測因子抽出を目標とする。</p> <p>さらに上記参加施設の中から選定された施設の協力を得て、非季節性感情障害（特に非定型症状を伴うもの）に対しても光療法を施行し、その効果を季節性感情障害に対する効果と比較検討する研究も開始させたい。なお通院中断例については、電話調査などによる追跡調査を行ない長期経過を明らかにする。全体を通して、季節性感情障害の疾患独立性に関する一定の緒論を出すこと、ならびに長期経過における季節性の保持と喪失の各要因を明らかにすること、さらに光療法の効果を実証し、その反応性予測因子を抽出することを目標とする。</p>	坂元教授	2
<p>(5) 気分障害の症状・経過に及ぼす自殺企図の影響</p> <p>気分障害患者や精神分裂病患者が重篤な身体疾患に罹患した場合、妄想・幻覚などの精神症状が改善する症例の存在が経験的に知られてきた。我々は、この点に関して多数例を対象に体系的な研究を施行し、様々な身体疾患の併発は、精神疾患の症状や経過に必ずしも陰性の影響を与えるだけでなく、陽性のインパクトを与えることも少なくないことと、身体疾患併発による精神症状改善のメカニズムを検討してきた。そうした研究の一環として、気分障害の症状・経過に及ぼす自殺企図の影響を検討する。自殺企図後に気分障害、特にうつ病の症状が著明に改善する症例が散発的に報告されているが、50例程度の多数例を対象に、自殺企図前後の精神症状の変化をretrospectiveに調査し、変化例に関してはその後の経過も調査する。さらに自殺企図を伴わないうつ病入院患者の精神症状変化との比較も施行する。この結果は、気分障害の臨床上、最も重要な課題の一つである自殺企図のprevention, intervendon, afterventionに対する指針を与えるものと思われる。</p>	坂元教授	2

研究可能テーマ	研究指導者	受け入れ可能院生数
<p>(6) 気分障害（躁うつ病）の病因解明のための分子遺伝学的研究</p> <p>種々の精神疾患の中でも、双極性気分障害（躁うつ病）は異種性が低く、その症状、経過の本態性からも生物学的基盤の関与の強さが最も想定されるものである。しかし気分障害の病因は世界中の研究者の努力によっても未だ解明されていない。われわれは、気分障害の病因解明のため、遺伝子解析研究（相関研究）に取り組んでいる。これまでこの分野においては、セロトニンやドーパミンなどの神経伝達物質のレセプターやトランスポーターの構造遺伝子の多型解析が盛んに行われてきたが、特定の責任遺伝子の存在を示唆する報告がなされても直ちに追試によってその結果が否定されることが続いている。</p> <p>したがってわれわれは、近年の遺伝子連鎖解析研究の成果を参考にし、神経伝達物質関連の遺伝子ではない新たな責任遺伝子を想定し研究を開始している。現在、双極性障害100例と正常コントロール100例を対象とした解析を目標として、症例を蓄積中である。</p> <p>実験手技としては、まず末梢血から抽出したゲノムDNAを用い、それをPCR（polymerase chain reaction）法によって増幅する。さらにSSCP（single strand conformation polymorphism）法によって、遺伝子変異の有無をスクリーニングする。変異の存在が示唆されるものについては、プラスミドDNAを用いたサブクローニングを行い、シークエンスを決定する。</p> <p>本課題では、双極性障害（躁うつ病）の病因解明という壮大な目標をかかげているが、その出発点は、双極性障害の臨床にあることを忘れてはならない。つまり上記のような遺伝子工学の基礎を学習することに加え、双極性障害の診断、治療の実際について学ぶことも必須の課題としたい。</p>	坂元教授	2
<p>(7) 慢性身体疾患の治療に携わる医師のストレスとメンタルヘルス</p> <p>糖尿病・腎不全・膠原病など、全身性慢性疾患における予後決定因子は、大きく疾患の重症度、医師の適切な治療、患者本人の自己コントロールに分けられる。慢性疾患の治療における医師・患者関係は必然的に長期に渡り、濃密なものになってくるが、このような関係では患者の側のみならず、医師の側でも心理的葛藤が生じやすい。医学モデルの視点からは患者の心理や精神症状に重点が置かれる一方、医師の心理とストレスに関しては看過されがちであるが、医者・患者関係という対人関係論でみた場合、医者側も同等に考慮されてしかるべきであろう。本研究では、治療者側のストレスをアンケートや聞き取り方式などで調査し、有効なメンタルヘルスおよびストレスマネジメントの方法論について研究する。</p>	加茂教授	2
<p>(8) 生体腎移植ドナーにおける臓器提供の意思決定と心理社会的アウトカム</p> <p>欧米諸国と大きく異なり、わが国では移植（腎、肝）の80%以上が生体ドナーからの提供によって成立しているが、ドナーの臓器提供の意思決定、移植後の心理社会的なアウトカムについて十分な調査がなされておらず、多数例を対象とした前向き研究が求められている。そこで生体腎移植ドナーにおける臓器提供の意思決定に関わる要因、移植後の心理社会的アウトカムの指標としてドナーの満足度に関わる要因を前向きコホートで検討する。この研究の成果は生体腎移植ドナーへの心理社会的な援助の指針を提供しうるものと期待される。</p>	西村講師	2
<p>(9) 遺伝子多型を用いてうつ病治療薬の効果や副作用を予測する</p> <p>遺伝子情報を用いて、個々人の特性に配慮したオーダーメイド医療の必要性が高まってきている。これが実現されることにより、より効果が高く、副作用の少ない薬物選択が可能になり、患者が享受するメリットは計り知れない。うつ病症例数で日本のトップレベルにある研究施設である当院の環境をいかし、うつ病オーダーメイド医療の臨床応用を目指す。</p>	高橋講師	2
<p>(10) 統合失調症薬物治療アルゴリズムの確立</p> <p>近年、統合失調症に対する効果的な新薬が次々と上市されてきている。日常臨床では、これらの薬剤を適切に使い分けながら、最適な治療薬を選択してゆく作業が必要である。現在、欧米諸国においては、その治療アルゴリズムが確立されているが、国内には存在しない。治療薬反応性には民族差が存在しているとの報告もあり、日本人に最適な治療アルゴリズムの探索が急務である。他施設との共同研究で、この治療アルゴリズム作成に関わる臨床研究を行う。</p>	高橋講師	2

研究可能テーマ	研究指導者	受け入れ可能院生数
<p>(11) うつ病と免疫応答の関係性を検討する</p> <p>一般臨床では、各種の身体疾患にはうつ状態が合併しやすかったり、うつ状態にある患者の身体疾患は治りにくかったりすることが知られている。近年、うつ状態と身体疾患の関係性を説明する概念として免疫応答が着目されるに至ってきており、血中のサイトカイン濃度は様ようなストレスイベントに反応し増加することや、抗うつ薬が血中サイトカインレベルを低下させるとの報告もなされてきている。うつ病治療を成功させるためには正確な診断と的確な薬剤選択が必須であり、それを確実なものにするために、うつ病のバイオマーカーを発見する必要がある。本研究の目的は、免疫反応に着目し、うつ病のバイオマーカーを見つけることである。</p>	高橋講師	2